

市長と住民の「こんだん会」
～ 臥雲市長にアタック！地域の元気な声を届けよう～
新村地区開催報告

1 日 時
令和5年2月17日（金）午後7時～8時30分

2 場 所
新村公民館 大会議室

3 テーマ
「地域防災をどう進めるか」
～ 新村地区防災計画の策定や松本大学との地域連携の取り組みから～



4 参加者
30名（市長、危機管理課長、都市計画課長、防災計画策定委員7名、あたらしの郷協議会会長、新村保育園園長、松本大学4名、傍聴者9名、地域づくりセンター職員5名）

5 懇談内容
地区概要
新村公民館視聴覚委員会作成の地区PR動画を紹介

新村地区防災計画策定の取り組み（あたらしの郷協議会 安全安心部会長）

- ・ 先般、地区防災計画策定委員会でおおまかな内容を作り、松本市の防災会議で承認されれば（市内35地区初の）正規な地区計画書となる。
- ・ 災害は忘れた頃にやってくるという言葉があったが、近年はそのような言葉どころではなく、日本各地で大規模な災害が発生している。阪神淡路大震災、東日本大震災、2019年の東日本台風災害では長沼地区の堤防が決壊した。松本市においては、2011年に長野県中部地震があり、芳川を中心に被害を受けたことがあった。
- ・ 新村でも2021年8月に豪雨災害があり、梓川右岸の堤防が決壊寸前になったこともあった。
- ・ 安全安心部会長の任命を受けて、防災士の資格を取った。日本防災士会という組織の会議で、地区防災計画の存在を知った。新村地区でも計画を作りたいと考えるようになった。
- ・ 地域防災計画は行政サイドからトップダウン方式で作られたものだが、地区防災計画



はボトムアップ方式で地区の住民同士で話し合って作られた。各地で地区防災計画が作られ始めているが、長野県では駒ヶ根市や下諏訪町で計画を作った事例がある。

- ・計画を作成するにあたって、まずは策定委員会の委員を決めることから始め、防災士、町会の代表、民生児童委員、社協の職員に入って貰った。



- ・2021年10月から会議を始め、延べ17回の会議を開催した。その間に資町会長や防災部長の皆さんに資料作成をお願いした。
- ・防災計画のなかに平常時の活動として、訓練や研修会、防災士の育成等の活動がある。防災活動を継続していくために、計画の見直しや改善を毎年実施していく。

- ・「命を守る災害時の避難カード」を作成し、全戸に配布する。一時集合場所を記入して貰い、家庭のなかに掲示して貰う。また、要支援者については、「ささえあいカード」に記入して貰い、町会長が把握して貰い、災害時に誘導をして貰う。
- ・避難所運営委員会の関係では、新年度から運営マニュアルの見直しを予定している。

松本大学との地域連携の取り組み

新村保育園長

- ・新村地区と松本大学の包括連携協定にもとづき、あたらしの郷協議会安全安心部会による地域防災の充実の一環として、地域合同避難訓練が行われている。災害発生時に新村保育園と地域の方々、松本大学の学生が連携を図り、園児の安全を守るとともに、保護者に確実に園児の引き渡しを行うというねらいがある。
- ・平成28年に地区と大学合同の防災訓練を実施したあとに、保育園の防災にも目を向けて貰い、平成30年に初めて地域合同避難訓練を開催した。以降、コロナ禍で大学生との交流が難しくなり内容を縮小した年もあったが、関係機関と連携を図りながら、今年度まで取り組むことができた。
- ・情報伝達ラインでは、本部の新村地区地域づくりセンターを軸として、町会と大学と保育園が連携を図る形となっている。
- ・災害初期段階では、まず保育園から保護者に連絡をし、地域づくりセンターにも応援要請を行う。地域づくりセンターから大学に連絡をして貰い、避難場所の大学グラウンドの確保と学生の応援要請をして貰う。併せて、地域住民の支援をお願いする流れとなっている。
- ・成果として、地域の方々が保育園に目を向けていただき、保育園を見守って貰っているという安心感が生まれている。

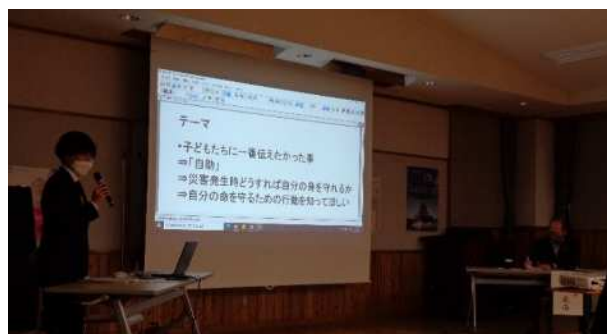


- ・今年度の訓練では、園児75名を職員だけで誘導すると15分以上の時間が掛かるが、大勢の方々の協力もあり、5分程度ですみやかに避難することができた。防災士の学生の講話を園児が聞いたが、分かりやすい視覚教材を使い、危機管理への意識が高まったと思う。

- ・課題として、実際に災害が発生した場合に、どれくらいの地域の方々が参集して貰えるかという点で、日頃から役割や避難ルートの確認を行う必要があると感じた。

松本大学大学院生

- ・2019年に防災士を取得。地域防災をテーマに大学院で研究をしている。
- ・保育園と連携した防災教育では、「自分の身を守る」という自助の点を園児達には伝えるようにした。災害時に適正な行動をどのように取ればよいのか、学生と園児達が一緒に考える機会とした。



- ・防災は難しいトピックであるため、園児達にどのように伝えるか学生は頭を悩ませたが、園児達が飽きずに興味を持って貰えるかという点を工夫した。中身は完結に、簡単な言葉を使ったり、動画や体操、クイズなどを盛り込んだ参加型の内容とした。

- ・YouTubeの幼児向け動画を使ったが、園児達の反応が良く、夢中で観てくれていた。

松本大学生

- ・地域で活躍できる防災士を目指して、日々勉強している。感染症の影響で、地域住民の方々と一緒に何かをする機会はなかった。そのため、園児達と大学生が避難訓練を行うことで、自助の大切さや、防災を学ぶ意味、そして自分の使命を再確認する機会となった。今後も大学と地域住民の方々との繋がりを大切に、自身も防災士として役割を全うしていきたい。

松本大学生

- ・昨年度、保育園との合同避難訓練に参加した。準備の段階から、どのようにして自助を伝えるか考える貴重な機会となった。現在、防災士の資格取得を目指し勉強中で、3月に資格試験を受験する予定。合格して、来年度も防災の学びを深めていきたい。



松本大学生

- ・一昨年と昨年の合同避難訓練に参加した。一番大変だと感じたのは、いかに簡単な言葉を使って、自分たちの身近に災害のリスクが潜んでいるのかという点だった。訓練では園児達が積極的に訓練に参加してくれた。3月に防災士の資格試験を受験予定。

松本大学大学院生

- ・防災、災害というのは老若男女問わず考える必要のあるトピックスだと思う。若い世

代が地域防災の担い手としてやらなければならないことは多くある。災害時や、地域との防災活動のなかで、若い世代がどのような役割を果たすべきかなどを日頃から考えながら活動を続けていきたい。新村地区の住民の皆さんには日頃から見守っていただきながら学生は安心した生活が来ている。松本大学生・防災士として地域に貢献できればと考えている。

地区住民との意見交換

町会連合会長

- ・地区防災計画を策定するにあたり、各町会から保有資材リストを提出して貰った。安塚町会でも防災部長と一緒に防災倉庫の確認をしたが、備えが不十分であることが分かった。さらに、時代に合った生活用品の保管も必要だと感じた。
- ・町会の防災マップを改めて見直すと、水路が溢れる危険性があるなど、新たに危険箇所が見つかり身近なところに目を向ける必要があると感じた。
- ・地区防災計画に基づいて、新年度から地区全体で防災意識向上の取り組みを進めていくが、実態に即したことを想定しながら訓練に取り組んでいきたい。
- ・地区防災計画の次のステップとして、避難所運営マニュアルの見直しをする予定となっている。運営委員会全体だと140名を超えるような組織規模となっているため、組織をコンパクト化し、機動性を持たせるようにしたい。各班のリーダーは職名委嘱で1～2年で交代となるため、委員の任期も5年程度伸ばすような構想を持っている。



民生児童委員協議会会長

- ・地区防災計画の策定にあたり、「ささえ愛カード」の改訂を行い、個別管理表の記入欄を加えた。カードは組長が管理するが、組長が見て内容が分かるように工夫した。
- ### 危機管理課長
- ・災害が発生したときに、どうしても慌ててしまうが、要支援者が何を求めているのか的確に把握するにはカードをとっても有効であると感じた。
 - ・共助の精神を育むにあたり、「フェーズフリー」という言葉がある。意味としては、災害が起きたときに何かするのではなく、普段の生活でやっていることは災害時に繋がるというもの。最近キャンプブームであるが、キャンプで使う物が災害時に使えるということがある。地域の活動に参加してもらうなど、普段からの顔の見える関係性づくりが災害時にも生きていくと思う。

市長

- ・「ささえ愛カード」できめ細かい情報を組長単位で整理が来ているという点は、災害時にも有効であると思う。一方で細かい情報を出したくない方々も地区によっては

いると思う。その点で新村地区の取り組みは市内でも進んでいると思うので、他地区にも情報として伝えて欲しい。

防災計画策定委員

- ・ 防災士の資格を取る際に、岡谷市で資格試験の補助制度があることを知った。松本市でもそのような補助制度を取り入れて欲しい。



危機管理課長

- ・ 防災士資格取得補助は、令和4年度から市危機管理課が事務局を務める防災連合会で補助金を交付することを始めた。各地区の防災に関わる人材育成を目的として始め、地区の防災部長の推薦を受けた方に対して3万円を補助している。防災連合会の予算の範囲内ではあるが、希望者がいれば地区で推薦してほしい。地区で何名ずつという規定はない。繰越金を含め、30万程度の予算はある。

防災部会長

- ・ これまでの地区の慣習や他役員との調整のなかで、防災部は任期は1年となっているが、その任期を例えば5年に延ばすということは非常に難しい問題であると思う。
- ・ 防災部の活動はあまり無く、現在は会長である自分だけが動いているような状況。
- ・ 防災の活動を身内だけで終わらせないために、例えば市のホームページでPRして貰うなどの広報活動が必要だと感じている。

市長

- ・ 市でもホームページやLINEなどのインターネットの通信手段を使って、情報発信を積極的にしようとしているが、防災に関してはそこまで出来ていないという状況にある。新村地区の取り組みを含め、もっと防災に関して全市民に向けて発信をしていく必要があると感じた。また、一部の人だけではなく、すべての人に関心を持って参加して貰う状況を作ることが大切だと思う。新村地区防災計画のなかに、防災マイタイムラインを令和10年度までに100%という目標を掲げているが、それに加えてもう少しハードルの低い取り組みをキッカケとして、日常的な話し合いを続けてほしいと思う。

町会連合会副会長

- ・ 新村地区ではコロナ禍等でしばらく運動会が出来ていない状況で、運営して貰っている新村体協からも続けていくのは難しいと相談を受けた。選手集めが大変であったり、競技をやるにしても色々な道具を作ったりと、出来る人間がないという状況であると。そのようななかで、来年度から防災運動会のような形に内容を変えて開催しよう

ではないかと話し合いが進んでいる。伝統のある運動会が形を変えても続けていけることは嬉しく思っている。

危機管理課長

- ・担架やバケツリレーなどを競技性を持たせて楽しみながら防災を学べるという内容で取り組んでいるところはある。運動会という形ではなくても、防災訓練のなかでそのような種目を取り入れてもよいと思う。

市長

- ・一時期、会社単位のものでも、若い世代が参加することに抵抗感があって無くなっていった状況が、コロナの前ぐらいから自分たちも共感できる形のものであれば参加したいという動きが若い世代の方から出てきていたように感じる。これまでの運動会のような本格的なものが出来ないということでも、例えば、松本大学と一緒に企画して貰い、訓練の実利と運動会の楽しさがミックスしたのを作ってもよいかと思う。もし新村地区でそのような形で実施して貰えば、他の地区にも波及し、良い動きが生まれてくるかもしれない。新村地区の最大の地域資産は松本大学である。この3千人ちょっとの人口の地区に、日常的に大勢の若者がいるということは、他の地区にない大きな資産であると思う。

松本大学大学院生

- ・松本大学には防災を学んでいる学生以外にも、健康や教育など多種多様な学問を学んでいる学生がいる。体育館やグラウンドなど資源も沢山ある。もしお声掛けいただければ、学生は協力したいと思う。

あたらしの郷協議会 地域振興部会長

- ・「フェーズフリー」という言葉に関連して、今は松本大学をよく知るというソフトの面が大切だと感じている。大学は避難場所になっているが、どこから入っていいかわからない人も多い。以前、住民を連れて大学のなかでコーヒーを飲む催しをしたが、そのような大学を知るといった活動が防災にも繋がるのではないかと思う。

市長

- ・松本大学があるという点は新村地区の強みでありチャンスだと思う。これから何か新しいものを生み出していくときに、住民と若い世代が良い意味で融合していければ、うまく共生していくのではないかと思う。



その礎として防災を位置づけることも、地域の皆さんの絆をつなげていけるキッカケになると思う。ぜひ防災というテーマでは松本市を牽引していただくよう取り組んで貰いたい。話のあった防災士の資格補助ということも、新村地区で多く手を挙げて貰えるのであれば、予算を確保していくことも出来るかと思う。引き続き、防災を中心としたまちづくりを進めていただきたい。